

「護持院原の敵討」 森鷗外自筆原稿

小 倉 齊

解 題

今回ここに翻刻するのは、早稲田大学図書館所蔵（旧蔵者は故本間久雄）の「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿（以下「原稿」）である。大正二（一九一三）年九月二十日の日記に「護持院原の敵討を書き畢る」とあることから脱稿期日が推定される。「護持院原の敵討」は森鷗外の歴史小説第四作として大正二（一九一三）年十月五日発行の『ホトトギス』第十七巻一号（二百六号）に「鷗外」の署名で発表され、翌大正三（一九一四）年五月七日、鳳鳴社より刊行された『天保物語』（菊判）に「大塩平八郎」（『中央公論』大3・1）とともに収録された。のち同じ紙型を用い、四六判に改装し、表題を『天保ものがたり』とした単行本が、大正九（一九二〇）年十月十五日、銀鈴社より出版された。「興津弥五右衛門の遺書」（『中央公論』大元・10）から「阿部一族」（『中央公論』大2・1）「佐橋甚五郎」（『中央公論』大2・4）に至る前三作が、天正から寛永・天保に至る幕藩体制の確立期において生じた君臣関係にまつわる事件を取り上げたものであるのに対して、「護持院原の敵討」は一転して材を幕末天保の巷間の事件、それも封建美徳の典型とも言うべき敵討に求めている。前三作がもっぱら封建体制を支える基本とも言うべき〈忠義〉の観念

「護持院原の敵討」 森鷗外自筆原稿

に焦点を合わせ、そこに封建権力と個人との矛盾相克の問題を見出そうとしたのに対し、「護持院原の敵討」は、幕藩体制が揺らぎ始める時期の敵討を通して封建時代の慣習と倫理の実態を究明しつつ、その中にうごめく人間模様には焦点を当てようとした作品と言えよう。

さて「原稿」は、無罫の洋紙（縦約二七・三厘、横約四二・〇厘）五十八枚に黒インク（あるいはブルー・ブラックが変色したものか）のペン字で書かれている。著者名は「鷗外」。和紙に裏打ちされ（五十六枚目が一行目から十行目までと、十一行目から十七行目までとの二枚に切断されて裏打ちされているため総計五十九枚）、表紙をつけた上で、和綴じにされている。表紙の向かって左上には、「護持院原の敵討 森鷗外自筆原稿／久雄（朱印）」と記された題簽が貼られている。朱印は旧藏者故本間久雄によるものである。「原稿」は帙に入れられ、帙にも表紙と同じ題簽が貼られている。

原稿用紙にはそれぞれ向かって右上に鷗外自身によるノンブルが「58」までつけられているが、これとは別に原稿用紙全ての末尾に「ほとゝぎす」印と通し番号の印（ただし五十七枚目は押し忘れがあり、五十八枚目が「57」になっている）が押されている。「1」には、題名「護持院原の敵討」の前に「ホトトギス巻頭」「二行アキ」の指示が、題名の上に「段ヌキ／ルビ付／十六行（十八行を消して修正）／五十一字詰」の指示が、署名「鷗外」の前に「題ト名トラ一行ニスル」の指示および校正記号「丁」が、題名と冒頭文との間に「一行アキ」の指示が、さらに題名に「1号」、署名に「3」という割付が、いずれも赤ペンでなされている。また、「58」末尾の波線に「段ヌキ」の指示が、これも赤ペンでなされている。

本文のほとんどに指示通り赤ペンによるルビがついているが、本文の前の頁、表紙の見返しの遊び紙にすぐ続く扉に当たる部分に、「雑誌ホト・ギス才十七巻一号／所載原稿 赤インキのルビ、／は当時の同誌編輯者島田／青峯氏の筆にかゝる 久雄（朱印）」とあること、鷗外による赤ペン修正部分のインクの色・質とルビ部分のインクの色・質とが違ふこと、本文の平仮名部分の字体・くずし癖とルビ部分の字体・くずし癖とが違ふこと、鷗外自身が黒ペンでルビをふったと思われる部分があることなどから、「原稿」中の赤ペンによるルビの大部分は島田青峯によると判断してよさそうである。

補入・修正は、黒ペンによる場合、赤ペンによる場合、朱筆による場合の三種類あり、最初原稿を執筆しつつ黒ペンでの補入・修正を行い、ついで赤ペンによる補入・修正を行った上で、最終的に朱筆でチェックしたのではないかと推定される。

「原稿」の成立過程にかかわる諸問題、あるいは「原稿」および「初出」における補入・修正から読み取れる鷗外の意識についてはいずれ稿を改めて検討することとし、ここではとりあえず、「原稿」における補入・修正のうち、とくに重要だと思われるものについて列記しておく。

一 山本三右衛門を襲った亀蔵の犯行動機について、語り手の判断保留のニュアンスがより強められている。

◎「いつか泊番の中の誰かを殺して、金を盗まうと、企ててゐたものと相違ない。」↓「早晚泊番の中の誰かを殺して金を盗まうと兼て謀つてゐたのであらう。」

◎「奥羽其外の凶歉のため、江戸は物價の騰貴した年なので、心得違のものが出来たのであらう。」↓「奥羽其外の凶歉のため、江戸は物價の騰貴した年なので、心得違のものが出来たのであらうと云ふことよゐつた。」

二 三右衛門の葬儀や敵討に関する酒井家からの沙汰が格式ばった言い回しに改変されている。

◎「平生の心得方が宜しかつたのだと賞美して、格式相當の葬を出しても差支ないと云ふのである。」↓「平生の心得方が宜しかつたのだから、格式相當の葬を出しても差支ないと云ふのである。」↓「平生の心得方宜し附、格式相當の葬儀可取行」と云ふのである。」

◎「首尾好く敵を討ち果せたら、帰参させる。若し敵が死んだら、その死んだと云ふ證違を持つて復命するが好いと云ふ沙汰である。」↓「首尾好く敵を討ち果せたら、帰参させよう。若し討たれぬうち敵が死んだら、その死んだと云ふ證違を持つて帰参するが好いと云ふ沙汰である。」↓「『早々本意を達し可立帰、若又敵人死候はば、慥なる證違を以可申立』と云ふ沙汰である。」

三 敵討に対するりよの意志の強さを強調している。

「護持院原の敵討」 森鷗外自筆原稿

◎「姉のりよは始終黙つて人の話を聞いてゐたが、願書より自分の名を書き入れて貰ふこと丈は、容を改めて要求した。」↓「姉のりよは始終黙つて人の話を聞いてゐたが、願書より自分の名を書き入れて貰ふこと丈は、きつと居直つて要求した。」

四 九郎右衛門の主人本多意氣揚を武士道に心入れの深い人物として設定している。

◎「武士道より心掛のあつた人」↓「武士道より心掛のある人」↓「武士道より心入の深い人」

五 九郎右衛門の意志、覚悟の強さを強調している。

◎「魚町の旅宿より三日ゐた。」↓「魚町の旅宿より三日ゐた。九郎右衛門が倅の家があつても、本意を遂げるまでは立ち寄りぬのである。」

六 神佛の加護による敵討の成就という論理の説得力のなさを強調している。

◎「『(前略) 神佛の加護があれば、敵よりはきつと逢はれる。歩いて行き合ふかも知れぬが、寝てゐる所へ来るかも知れぬ。』
／字平の口角よりは醜い微笑が閃いた。」↓「『(前略) 神佛の加護があれば、敵よりはいつか逢はれる。歩いて行き合ふかも知れぬが、寝てゐる所へ来るかも知れぬ。』
／字平の口角よりは微かな、嘲るやうな微笑が閃いた。」

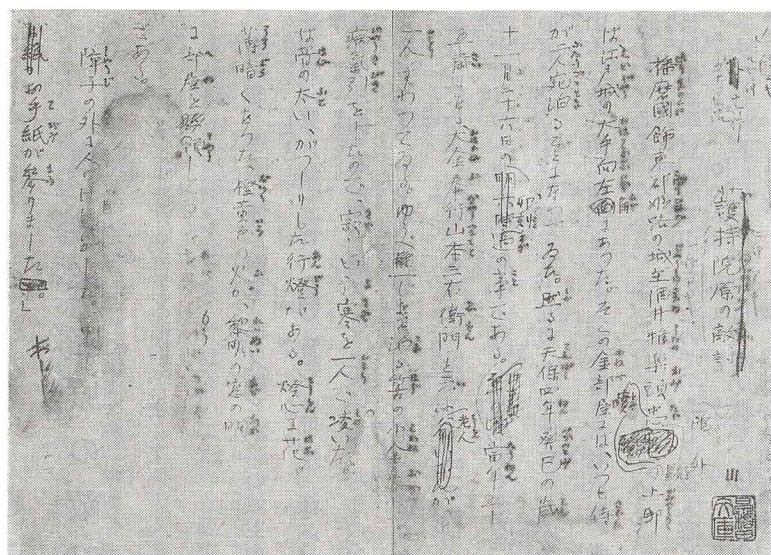
本稿における翻刻は、可能な限り、「原稿」の成立過程、「原稿」と「初出」本文との異同が明らかにできるよう配慮した。以下、次に示す凡例によりつつ翻刻を行うこととする。

凡 例

一 「初出」を底本としたが、可能な限り「原稿」に忠実なることに努め、俗字・異体字・変体仮名や誤字・脱字等は「原稿」の表記のままとした。ただし、略字や極端なくずし字で表記されている場合は、該当の文字の下に※を付けて示した。

二 「原稿」段階における黒ペンによる補入は――、削除は()で示した。

三 「原稿」段階における赤ペンによる補入は――、削除は()で示した。



1 枚目 —16頁参照—

四 「原稿」段階における朱筆による補入は〃〃〃、削除は「」で示した。

五 「原稿」段階における文字・語句等の入れ替えは《》⇕《》で示した。

六 「初出」段階における補入・修正は……、削除はへで示した。

七 同一箇所複数の補入・修正がある場合は、それを／で分け、示した。

八 破損・水ぬれによる判読不可能な箇所は□で示し、「初出」によって推定した文字を右傍に示した。

九 ルビは「初出」通りとし、二〃八に従って「原稿」との違いを示した。ただし、判読不可能な箇所については省いた。

十 原稿用紙の終りは』で示し、かつその枚数を『の下にアラビア数字で付記した。

十一 特に注解を要する箇所は、アラビア数字による通し番号をつけて、巻末に補注した。

〔に〕
護持院原の敵討

鷗 外

播磨磨國磨飾飾東郡姫姫路の城主酒井雅樂頭忠實〔績〕〔實〕〔顯〕實の上邸は、江戸城の大手向左〔側〕角へよにあつた。その金部屋へよには、いつも侍が二人宛泊ることへよになつてゐた。然るへよに天保四年癸巳の歲十二月二十六日の〔明六時〕卯の刻刻過の事である。〔年の頃〕〔けさは〕當年五十五歲へよになる、大金奉行山本三右衛門と云ふ〔爺いさん〕老人が、唯一人すわつてゐる。ゆへうふべ〔は〕一しよへよに泊るは、小金奉行病氣引したので、寂しい夜寒寒をひとりで凌いだのである。〔傍〕は骨の太い、がつしりした封書がある。燈心へよ花に花薄暗くなつ

た、橙黄黄色の火が、黎明の窓の明等分へよに部屋を〔照〕領領してゐる。夜具はもう夜具葛籠籠てある。障子の外へよに人のけはひがした。申し。お宅か急用の〔お紙力〕お手紙が参りました〔が〕。〔お前〕前は誰だい。〔お表の小使〕使でございます。三右衛門は内から障子をあけた。手紙を持つて來たのは、名は知らぬが、見識識つた顔の小使使で、〔ある〕二十へよになるかならぬの〔若〕若〔い男〕者である。受け取つた〔手〕封書を持つて、行燈の〔前〕前に

物へ音を聞き附けて、最初へよに駆け附けたのは、泊番の徒目附であつた。次いで目附が来る。大目附が来る。本へ締締が来る。(囃)醫師を呼びへよに遣る。三右へ衛衛門の妻子のゐる囃敷町の中邸へ使使が走つて行く。

三右へ衛衛門は「精神」精神が慥で、役人等へよに問※はれて、はつきりした返事をした。自分へ分分には意趣遺恨を受ける覺は無い。白紙の紙を持つて来て、切つて掛かつた男は、顔顔を知つて名を知らぬおもてこ。多分金銀は望を懸けたものであらう。家とくさうぞく。督相續の事を宜しくへ頼頼む。敵敵を討つてくれるやうへよに言つて貰ひたいと云ふのである。其間※三右へ衛衛門は「残」残念だ。残念だ」と度々繰り返して云つた。

現場へよに落ちてゐた刀は、二三日へ前作事の方へよに勤めてゐるた五へ瀬瀬某が、詰所へよに掛けて置いたのをへ盗盗まれた品であつ

た。門番を調べて見れば、卯へ刻刻過へよに表小へ使使龜(吉)藏と云ふものが、へ急急用のおへ使使だといつて通用門を出たと云ふことである。龜(吉)藏はへ神神田久右へ衛衛門町代地の仲間口入宿富士屋治三へ郎郎が入れた男で、二十歳へよになる。下へ請請宿は若狹屋龜吉である。表小へ使使使龜(吉)藏が部屋を改めて見れば、山本の外四人の金部屋役人へよに、それへ宛宛てた封書があるで、あつて、中は皆白紙である。

察するへよに龜(吉)藏は、いつか早へ晩晩泊番の中の誰かをへ殺殺殺して、金へ盗盗まうと、(企て)へ兼兼て謀つてゐた(ものゝ相違ない。)のであらう。奥奥羽其外の凶凶歌のためへよに、江へ戸戸は物價貴した年なので、心得違のものがでであらうと云ふことへよふになつた。天保四年(米が□は小賣米百文は五合五勺へよ)になつた、天明以後のへ飢饉飢饉年である。』

醫師が来て、三右〈衛〉衛門へよに手當をした。

〈親〉親族が（蠣殻町から）駆け附けた。蠣殻町の女中、中邸から来たのは、三右〈衛〉衛門の女へ房、房と

〈倅〉倅字へ平とである。字へ平は十九歳へよになつてゐる。字へ平の姉姉りよは、（元哲願寺

前の）細川長門守與建建の奥奥に勤めてゐたので、（元哲願寺前）豊嶋町の細川邸から來

た。（三右）當年二十二歳である。三右〈衛〉衛門の（妻

は）女へ房房は後添で、りよ（も）と字へ平平との

ためへよには繼母である。此外へよにまだ三右〈衛〉衛

門の妹で、小倉新田の城主小笠原備後守貞謙謙の

家來原田某（よ嫁してゐる）の妻へよになつて、〈麻〉麻

布日が窪の小笠原邸へよにゐるのがあるが、それは間

へよに合はないで、酒井邸へよには來なかつた。

三右〈衛〉衛門は醫師が〈餘〉餘り物を言はぬが好いと云ふのへよに構へず、女へ房房子供へよにも、役人へよに

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

蠣殻町の〈佐〉住ひは手狹で、介抱が行き届くまいとへ云言ふので、濱町添邸の〈神戸〉神戸

某方で、三右〈衛〉衛門を引き取るやうへよに沙汰せられ

た。これは山本家の遠い親戚である。妻子はそこへ附き添つて往つた。そのうちへよ

に原田の女へ房房も來た。

〈神戸〉神戸方で三右〈衛〉衛門は二十七日の寅の

刻刻に絶命した。

其日の西の下刻刻に、上邸から〈檢使〉見へ分

分に來た。徒目附、小人目附等へよに、手附が附

（ひ）いて來たのである。（檢使）見へ分の役人は

三右〈衛〉衛門の女へ房房、倅字へ平平、娘

りよの口「上」書を取つた。

（檢使）役人の復命へよに依つて、酒井（侯）家から沙汰があつた。三右〈衛〉衛門が重手をへ負ひながら、癖者を中の口まで追つて出たのは、「へ平平

は、**敵** 敵討をしなくてはならない。ましてや三右

〔よ〕に遭^あつたことかと繰^くり返^{かへ}してくどく(ばかり)の|

であつた。日が窪から来る原田夫婦や、未亡人の
 實(兄)弟櫻井須磨右衛門は、いつ

然る^{しか}へよにこへこよゝに親親戚一同がひどく

男は本國ほんこく〈姫ひめ〉姫路ひめぢ〈よよ〉にあるので、かう云いふ席せき

〈よ〉には列れつすることが出来でき（ぬ）なかつたが、訃ふへ音

よ音に接するや否や、弔慰の状をよこして、敵

敵討へよあだのかたきうちにはきつ□助太刀とすけだちをすると(云)誓つたちか

のである。〈姫〉姫路では此男は（汨）家□□□意氣揚

へまに仕へてゐる。名は山本九郎右衛門

門もんと云いつ□□て、(十五)當年たうねん四十五歲さいへゝになる。亡へふな。

くなつた三右衛門（三右衛門）衛門がためへよ（へよ）には□（□）九つ

違^{ちがひ}の實^{じつ}〈第〉弟^{てい}である。』⁹

九〔郎〕 郎右 〔ろ〕らう
〔衛〕 衛門 ゑもん は兄 あに の計 え
〔音〕 音 いん を得 え た

時、^{とき}すぐへよに主人意氣揚^{しゅじんいきり}へよに願書^{ぐわんしょ}を出した^だ。

甥をひ、女姪めひが、敵あだ討かたきをするから、自じ分ぶんは留る

「護持院原の敵討」 森鷗外自筆原稿

守を〈倅〉倅〈健〉健藏〈よ〉に委せて置いて、助太刀

へよに出たいと云ふのである。主人本多意氣揚は徳川

家康が酒井家いへやす さかゐけへへつけた意氣揚の子孫で、い きり しそん武ぶ

士道しだうへこころに心こころ（掛の（あつた）ある）入いれの深ふかい人ひとな

ので、すぐへよに九へ郎くろらう郎右へ衛ゑもん衛門の願を聞ねがひき

※き 〔屈〕 屈とどけた。〔正〕 江え 〔戸〕 戸どではまだ 〔敵〕

敵あだかたき
 (討う)
 討うの願ねがひを出だしたばかりで、上かみからなんの沙さ

汰たもないうちへよに、九く郎らう郎らう右みぎ衛ゑもん衛門ゑもんは

意氣揚から拵附の刀一い きり こしらへつき かたへなひと
 〈腰〉腰と、手當金二十兩こし てあてきん りやう

とを貰つて、**〈姫〉**姫路ひめじを立つた。それが正月二十三しやうぐわつ

にち
こと
日の事である。

二月ぐわつ(七)五日かへいにに九くへい郎らう郎らう右みぎへい衛ゑ門もんは

江^え戸^こ戸^{かき}蠣^{かき}殻^{がら}殻^{がら}町^{ちやう}の中^な邸^{やかやしき}へ^へまにある^{ある}山^{やま}本^{もと}字^{とう}

〔平〕平が宅〔ま〕に着いた。字〔平〕平を始、細川

家^けから暇^{いとま}を取^とつて〈帰〉
 歸^{かへ}つて□^み□^た〈姉〉
 姉^{あね}のりよが

喜^{よろこび}
は譬^{たと}へやうがない。
沈着^{ちんちゃく}で
() () () () ()
口^{ぐち} 敷を

きかぬ、筋骨たぐま
遅い叔父を
父父を見たまかりで、
姉もあね

「弟も安堵の思をしたので□□□」

「まだこつちではお許は出んかい」と、九〈郎〉 郎右〈衛〉衛門※は字〈平よ〉平に問うた。

「はい。まだなんの御※沙汰もございません。お役人方へよ」に伺ひましたが、多へ分分忌中だから御沙汰がないのだらうと申すことで。」

九〈郎〉 郎右〈衛〉衛門は肩間へよに皺を寄せた。暫くして、「大きい車は廻廻りが遅いのう」と云つた。

それから九〈郎〉 郎右〈衛〉衛門は、旅の支度が出来たかと問うた。いづれお許が出てからと、字〈平〉平が云つた。叔父父の肩間※へよには又又皺が寄つた。併し今度は長い間なんとも言はなかつた。外の話の色々した跡後で、叔父父は思ひ出したやうへよに云つた。「あの支度はもう、先へして置いても好いぞよ。」

六日へよには九〈郎〉 郎右〈衛〉衛門が兄の墓参

をした。七日へよには濱町の〈神戸〉神戸方へ、兄が

末期へよに世話へよになつた（からと云つて、）禮

よ往禮に往つた。西北の風の〈強〉強い日で、丁度九

〈郎〉 郎右〈衛〉衛門が〈神戸〉神戸の〈内よ〉家に

ゐる□□□□田から火事が始まつた。〈歴〉歴史に残

つてゐる午年の大火である。未の〈刻よ〉刻に佐久間

町二丁目の琴三味線師の家から出火して、日本橋方

面へ〈焼〉焼けひろがり、〈翌朝〉翌朝卯の〈刻ま〉刻

なで〈焼〉焼けた。「八つ時へ分分三味線屋からこと

を出し火の手がちりてとんだ大火事」と云ふ落首が

あつた。

（一）濱町も蠅殻殻も風下で、火の手は三つ

へよ分に分かれて〈焼〉焼けて来るのを見て、〈神戸〉

神戸の〈内よ〉内は人手も多いからと云つて、九〈郎〉

郎右〈衛〉衛門は蠅殻殻飛んで〈帰〉歸つ

た。山本の〈内よ〉内では九〈郎〉 郎右〈衛〉衛門※が指

〈図〉圖をして、荷物は残らず出させたが、(中邸) 申の下〈刻よ〉刻には中邸一面が火へよになつて、(宇平) 山本(の内)も〈焼〉焼けた。

りよは火事が始まるとすぐ、〈舊〉舊主人の細川家の邸へ、烟を潜つてをさして駆け(附け)て行つたが、もう〈豊嶋〉豊嶋町は火へよになつてゐた。「あぶないく」(と云ふもの)へ、「姊」姉さん火の中へ逃げちやあいけねえ」などと云ふものがある。とう／＼避難者や彌次馬共の間※へよに挟まれて、身動もならぬやうへよになつてゐる。頭の上へは火の子がばら／＼落ちて来る。りよは〈涙〉涙ぐんで龜井町の手に前へ引き返してしまつた。〈内〉内へはもう叔父が濱町から〈帰〉歸つて、荷物を片附けてゐた。

濱町も矢の倉へよに近い方は大部へよ分焼けたが幸へよに酒井家の添邸は〈焼〉焼けた。〈神戸〉神戸家へ重々世話へよになるのは氣の毒だ

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

と云ふので、宇へよ平へよ一家は矢張遠い〈親〉親戚へよになつてゐる、當る添邸の山本へよ平作方へ、八日の辰の刻刻(時)過へよに避難した。

三右衛門衛門が遺族は山本へよ平作方の部屋を借りて、夢の中で夢を見るやうな心持へよになつて、ぼんやりしてゐた。未亡人亡人は頭痛が起つて起つてへよ寝た切である。宇へよ平は腕組をして何やら考へ込む。只りよ一人(が)へよ平作の家族へよに氣へよ兼をしながら、甲へよ斐斐々々しく立ち働いてゐる。ゐたが、午頃へよになつて細川の奥奥方の立退所※が知れた。たので、すぐ見舞へよ往に往つた。

〈晩よ〉晩にりよが〈帰〉歸ると、九へよ郎右衛門衛門が云つた。「おい。もう當分我々は家なんぞはいらへよんが、若殿が旅へよに出て風

を引かぬやうへよに、支度へ丈、丈はして遣らんではなら《ない》んぞ。」叔へ父へ父は字へ平へ平を《若》若殿々々と呼ん」¹³で押へ掬へ掬つてゐるのである。

「はい」と云つたりよは、其《晚》晩から字へ平へ平の衣類へよに手を着けた。

九日へよにはりよが旅支度へよにいる物を買ひへよに出た。九《郎》郎右《衛》衛門が書附へよにして渡したのである。けふは風が南へよに變つて、珍らしく暖いと思つてゐると、西の上へ刻よ又刻に又檜物町から出火した。をとつひへ焼へ焼け残つた町家が、又又此火事でへ焼へ焼けた。

十日へよには又寒へ又寒へ又寒へ西北の風が《強》強く吹いてゐると、正※午へよに大名小路の松へ平へ平伯耆守宗發※の上邸から出火して京橋方面が芝口へ掛けてへ焼へ焼けた。

續いて十一日へよにも十二日へよにも火事がある。物價の高いのへよに、災難が引き續いてゐるの

で、江へ戸へ戸中人人心恟々としてゐる。山本（家で）方で商人へよ注文に注文した、少しばかりの品物へよにも、思ひ掛けぬ手違□出来て、りよが幾ら氣を揉んでも、支度がなか／＼はか□□ない。

或る日九《郎》郎右《衛》衛門は烟草をへ飲へ飲みながら、りよの裁縫するのを見てゐたが、不審らしいへ顔へ顔をして、烟《草》管を下へよに置いた。「なんだ」¹⁴い。そんなちつぽけな物を拵へたつて、しやうがないぢやないか。《若》若殿はのつぽでお出でへよになるからなあ。」

りよはへ顔へ顔を赤くした。「あの、これはわたくしので。」縫つてゐたのは女の脚へ絆へ絆甲掛である。(8)

「なんだと。」叔へ父へ父は目を大きく《睜》睜つた。

「おへ前へ前も《武》武者修行へよに出るのかい。」(9)

「はい」と云つたが、りよは縫物の手を停めない。

「ふん」と云つて、叔へ父へ父は良久しく女《姪》姪のへ顔へ顔を見てゐた。そしてかう云つた。「そいつ

は駄目だ、お〈前〉前のやうな可哀らしい女の子
□連れて、どこまで〈往〉往くか〈分〉分からん旅が
来るものか。〈敵〉敵にはどこで出逢ふか、何年立
つて出逢ふか、まるで當がないのだ。己と字〈平〉平と
は只それを捜しへよ〉に行くのだ。見附かつてからへ
お〈前〉前に知らせれば好い□□ないか。」

「仰やる通、どこでお逢へよ〉になるか知れませんか
へよ〉に、きつと江へ戸へお知らせへよ〉になるこ
とが出来ませうか。それへよ〉に江へ戸へ戸から〈参
参るのを、(お待) 15 きつとお待へよ〉になることが出
来ませうか。」罪のないやうな、〈狡〉狡猾らしいやう
な、くりくした目で、微〈笑〉笑を〈帯〉帯びて、叔
父の〈顔〉顔をぢつと見た。

叔父は少からず狼狽した。「なる程。
それは時と場合とへよ〉に依る事で、わしもきつとは
云ひ〈兼〉兼ねる。出来る事なら、どうへよ〉にでもし
てお〈前〉前を其場へ呼んで遣るのだ。萬一間※へよ〉

に合はぬ事があつたら、それはお〈前〉前が女へよ〉
に生れた不肖の肖だと、〈諦〉諦めてくれるより外な
い。」

「それ御覧※遊ばせ。わたくしはどうしてもその
萬一の事のないやうへよ〉にいたしたうございます。
女は連れて(往)行かれぬと仰やるなら、わたくしは
尼へよ〉になつて〈参〉参ります。」

「まあ、さう云ふな。尼も女ぢやから(なあ)の
う。」

りよは涙を縫物の上へよ〉に落して、〈黙〉黙つて
ゐる。叔父は一面詞を盡して慰めたが、一面
女は連れて行かぬと(云ふ事だけは)、(どうして
も)きつぱり(と)言ひ渡した。りよは〈涙〉涙を
拭いて、縫 16 (し)ひきした脚〈絆〉絆をそつと側
へよ〉にあつた風爐敷〈包〉包の中へよ〉にしまつ
た。

ひさした脚絆をそつと側であつた風爐敷の中はしまつた。

酒井雅事頭は月番老中久保加賀守忠義と三奉行といふ

濟の上で二月二十七日附を以て、宇平より九郎右衛門の三人は死な

大目付連累の證文を度して、敵討を許した。首尾よく敵と討ち

んたら、その死んだとある證據と持つて復命すがねと云ふ

た
休である。三人は手當を^し置^き留守へは扶持^しり^が

貴^きけ^けの^の本^{ほん}家^け回^りりよはお許は出て、敵を捜し^は旅^{りょ}を

ぬるとなつて見れば、それで未亡とりよとの、江戸での女所さ

めを置けば、宗兼丸郎右衛門とは出立することか出来

ある。

りよは小笠原郎の屋田夫婦が先引き取ることなる

人は頼^{たの}海^{かい}の上で、柳井里方^{さとあ}柳井須磨^{すま}右衛門^{えもん}で保^ほ卷^{まき}すること

なつた。

酒井(雅楽頭) 忠(顯) 實は月番老中大久保加賀守忠(愼) 眞と三奉行とへよにへ届 届濟の上で、二月二十六日附を以て、宇平、平、りよ、九郎、郎右衛門の三人へよ宛に宛てた、大目附連署の證文を渡して、敵討を許した。《首尾好く敵を討ち果せたら、帰参させ(る)》よう。若し(敵が死) 討たれぬうち敵が死んだら、その死んだと云ふ證據を持つて《復命》帰参するが好い。《早々本意を達し可立》《帰》《歸》《若又敵》若又敵人死候はば、慥なる證據を以可申立」と云ふ沙汰である。三人へよには手當(下)遣る。留守へは扶持(をくれる)が(貰はれる)。(山本一家は)下がる。りよはお許は出ても、敵敵を搜しへよには旅立たぬことへよになつて見れば、これで未亡人ととりよとの、江戸戸での居 所※さへ極めて置けば、《宇平、と九郎》郎右衛門《と》宇平平の二人は出立するこゝとが出来るのである。

りよは小笠原邸の原田夫(婦) 婦が一先引き取ることへよになつた。病身な未亡 亡人は願濟の上で、(櫻井) 里方櫻井須磨磨右衛門(方)の家で保養することへよになつた。17

さていよ(宇平、九郎) 郎右衛門衛門、宇平平の二人が門出をしようとしたが、二人共敵の顔顔を(見覺えて) 識らない。人相書だけをたよりへよにするのは、いかへよにも心細いので、口入宿の富士屋や、請請宿の若若狭屋へ往往つて、色々問ひ質したが、これと云ふ(手がかりも)事實も聞※き出されない。それへよに容容貌貌が分分分からぬばかりでなく、生國も紀紀州州だとは云つてゐたが、確確としたことは分分分らぬらしい。只酒井家へよに奉公する前前前には、上(野國) 州高崎へよにゐたことがあると云ふ丈丈であ

る。
其時山本(平) 平作方へ突然(尋) 尋ねて來た男が

ある。此男は近江國淺井郡の〈産〉産で、少い時へよに江へ戸へ出て、諸家へよに仲間奉公をしてゐるうちへよに、丁度龜藏と一しよへよに酒井家の表小へ使へ使をして、三右へ衛衛門へよには世話へよになつたこともあるので、若へ若しお役へよに立つやうなら、幸今は酒井家から暇を取つてゐるから、敵敵の見識識人として附いて行つても好いといふ云ふのである。名は文吉と云つて、四十二歳へよになる。體は丈丈夫で、渡者の仲間へよには珍らしい、實直なものだと云ふことが、一目見て分かつた。

九へ郎郎右へ衛衛門が（逢）會つて話をして見て、すぐへよに宇へ平平の家來へよに召し抱へ抱へることへよにした。

（宇平、）九へ郎郎右へ衛衛門、宇へ平平、文吉の三人は二十九日へよに菩提所へ遍へ

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

遍立寺から出立つことへよ極へに極めて、前へ前日へよに濱へ町の山本へ平平平作方を引き拂つて、寺へ往へ往つた。そこへは病氣のまだ好くならぬ未亡人の外へは、りよを始へ親親戚一同が集まつて来て、先づ墓へ参をして、それから離別の盃を酌へ酌へみへ交交した。佐へ住持は其席へ蕎麥を出して、「これは手討のらん切でございます」と、茶番めいた口上を言つた。親親戚は笑ひ興じて、只一人打ち萎れてゐるりよを（連れて）促し立てへて帰へ歸つた。

寺へよに一夜へ寝寝て、二十九日の朝へ朝三人は旅へよに立つた。文吉は荷物へ負へ負つて一歩跡を附いて行く。龜吉藏が奉公へ前へ前にゐたと云ふのをたよりへよにして、最初上野國高崎をさして往へ往くのである。

九へ郎郎右へ衛衛門も宇へ平平も文吉も、高崎をさして往へ往くのへよに、龜藏が高崎へよにゐさうだと云ふ氣（はし）へよになつてゐ

た。

一行が二日以上泊るのは、稀まれへよに一日の草へ卧ふしを（した）することもあるが、大抵何（が）か手掛へかりがありさうへよに思はれるので、特別搜索をするのである。松坂では殿町へよに目代岩橋某と云ふものがゐて、九へ郎郎右へ衛衛門※等の言ふことをへ親親切へよに聞※き取つて、綿密な調べをしてくれた。（其）その調べ上げた事實をへ言云つて聞※された時には、一行はへ暗暗中の燈火をへ認めたやうな気がしたのである。

松坂へよに深野屋佐兵へ衛衛門と云ふ大商人（あ）がある。そこへはへ紀紀伊國熊野浦長へ嶋島外町の漁師定右へ衛衛門と云ふものが毎日魚をへ送送つてよこす。其へ縁縁で佐兵へ衛衛門は定右へ衛衛門一家と心安くなつてゐる。然るへよに定右へ衛衛門の長男龜藏はへ若若い時江へ戸戸へ出て、へ音音

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

音信不通へよになつたので、二男定助へをたより

へよにしてゐる。（のであ）と云ふことであつた。）

其龜藏が今年正※月二十一日へよに、（落魄の體で）檻褓を身（を）へよに纏つて深野屋へ尋尋ねて來た。佐兵へ衛衛門は「おへ前前」のやうな不孝者

た。佐兵へ衛衛門は「おへ前前」のやうな不孝者

（よは）を止（留）めて置くことは、へ親父親父様へよに知らせずへよに（）留めて置くことは出來ぬ」と云つた。（後よ聞※けば、龜藏は）龜藏はすぐ

へ深野屋の店を立ち去つたが、それを見たものが、

「あれは紀州のへ熊龜藏と云ふ男で、なんでも江へ戸戸で悪い事をして、逃げて來た（もの）のだらう」と

へ評判へ評判した。

後へよに深野屋へ聞※えた所へよに依ると、龜藏は正※月二十四日へよに、（父定右衛門が事）熊野仁

へ郷郷村へよにゐるははかたの（をち）舅小

へ父父林助の（門）家へよに來て、置いてくれと

へ頼頼んだが、林助は貧乏してゐて、人を置くことが

出来ぬと云つて、〈劬〉勸めて〈父〉父定右〈衛〉衛門
※が許へ〈帰れと勧めた。〉遣つた。知人へよにたよ
らうとし、それが慍はぬ段へよになつて、始て親
戚をとおつれ、親戚へよにことわられて、龜
藏はやうやう親許へ帰歸る氣へよになつた
らしい。定右衛門の家へよには二十八日へよ
に帰歸つた。

二月中旬へよに龜藏は江戸で悪い事をして
帰歸つたのだらうと云ふ噂が、松坂から定右
衛門の所方へ聞きた。定右衛門衛門※が
何をしたかと問うた時、龜藏は目上の(もの)

人へよに創を負はせたと云つた。そこで定右
衛門と林助とで、龜藏を坊主へよにして、高野
山へよに登らせる(こと)ことへよにした。二人
が剃髪剃髪した龜藏を三浦坂まで送送つて別れ
たのが二月十九日の事である。龜藏は其時茶の辨慶縞の
木綿綿入を着て、(其上)木綿帯帯を締締め、

《て、》藍の股引を穿穿いて、脚絆絆を當て
てゐた。懷中へよには一兩持つてゐた。

龜藏は二十二日へよに高野領清領清水村の又
又兵衛衛と云ふものへ家へよに泊つて、
翌翌二十三日も雨が降つたので滯滯留し(た)
た。そして二十四日へよに高野山へよに登つた。山
で逢つたものもある。二十六日の夕方へよには、(麓)
下山して橋本へよにゐたのを人が見た。それから行
方不明へよになつてゐる。多分分四國へでも渡つ
たかと云ふことである。

松坂の目代へよに此へ顛顛末を聞きた時、この
坊主へよになつた定右衛門衛の倅龜藏が敵
敵だと云ふことへよに疑を挟むものは、主従三人
の中へよに一人も口かつた。宇平平はすぐへよ
に四國へ尋尋ねへ往往に往かうと云つた。併し九
郎郎郎右衛門衛が(云ふは、)それを止めて、

四國へ渡つたかも知れぬと云ふのは、根據のない推量である、四國へもいづれ「往」往くとして、先づ手近な土地から搜すが好いと云つた。』²³

一行は松坂を立つて、「武」武運を「祈」祈るためへ「参」に参宮した。それから關※を経て、東海道を攝津國大「坂」⁽¹⁹⁾「阪」へに出て、こゝへ「こゝ」に二十三日を費した。其間※へ「よ」に松坂から「便」便があつて、紀州の定右「衛」衛門※が倅の行末を心配して、氣病で亡くなつたと云ふ事を聞※いた。それから西宮、兵庫を経て、播「磨」磨國へ「よ」に入り、明石から本國へ「姫」姫路へ「よ」に出て、魚町の旅宿へ「よ」に三日ゐた。九「郎」郎右「衛」衛門※へ「が」は倅の家があつても、本意を「遂」遂げるまでは立ち寄りぬのである。それから備前國へ「よ」に入り、岡山（、下村）を経て、下山から六月十「五」六日の夜舟へ「よ」に乗つて（てか）て、いよゝ四國へ渡つた。松坂以來九「郎」郎右「衛」衛門※の搜索方鍼へ「よ」に對して、「稍」稍不滿

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

らしい氣色を見せながら、詰まりは意志の堅※固な、（氣分）機嫌へ「よ」に「浮」沈のない叔父へ「父」父に威壓せられて、附いて歩いてゐた宇「平」平が、此時へ「急」急に活氣を生じて、（夜）舟の中で夜の更けるまで、話し續けた。

十六日の「朝」朝舟は讃岐國丸龜へ「よ」に着いた。へ「文」文吉へ「よ」に松尾を「尋」尋ねさせて置いて、二人はへ「象」象頭山へ「祈」祈願へ「よ」に登つた。するとへ「参」参（詣）へ「籠」籠人が丸龜で一癖ありげな、他所者のへ「若」若いへ「僧」僧を見たとき云ふ話をした。宇「平」平はもうへ「敵」敵を見附けたやうな氣へ「よ」になつて、亥のへ「刻」刻へ「よ」に山を下つた。丸龜へ「よ」帰に歸つて、へ「文」文吉を松尾から呼んでへ「僧」僧を見させたが、それは別人であつた。』²⁴

伊豫國の銅山は諸國の惡者の集まる所だと聞※いて、一行は銅山を二日搜した。それから西「條」條へ「よ」に二日、小春、今治へ「よ」に二日（、）あて、松山から道後

の温泉へよに出た。こへ来るまでへよに、暑をへ侵して旅行をした宇へ平は、留へ飲飲痴痛へよに悩み、へ文文吉も（少し）下痢して、へ食食事が進（まぬ）へまなかつたまぬので、湯町で（五）五十日の間保養した。大へぶ分體が好くなつたと云つて、中大洲を二日搜して、八幡へ濱へ濱に出ると、病後を押して歩いたへためよ宇へ平平が、力揚げがして煩つた。そこで五日間滞留して、やうく九州へ通行の舟へよに乗ることが出来た。四國の旅は空しく過ぎたのである。

舟はへ豊豊後國佐賀關へよに着いた。鶴崎を経て、肥後國へよに入り、阿蘇（へ）山の阿蘇へ神宮、熊本（へ）清清正公（へ）へ祈祈願へ參つて、熊本（へ）を三日、と高橋（へ）を三日、とを三日へ宛搜して、舟（へ）で肥（へ）前前國へ嶋島原へよに渡つた。そこへよに二日あて、長崎へ出

（て）た。長崎へよに來て三日目へ敵敵らしい（もの）へ僧僧をへ嶋島原で見たと云ふ話を聞いて、引き返してへ又又へ嶋島原を五日へ尋ね（廻つ）た。それから熊本（で）をへ更に三日、宇土を二日、へ八代を一日、南工宿を二日へ尋ねて、再び舟で肥（へ）前前國温泉嶽の下（へ）港（へ）へ渡つた。すると長崎から來た人の話へよに、へ敵敵らしいへ僧僧の長崎へよにあることを聞いた。（それは）長崎上筑後町の一向宗の寺へよに、勧善寺と云ふのが（あつて）、ある。そこへ二十歳へ前前後のへ若い（坊主）へ僧僧が來て、へ棒を指南（へ）をするしてゐると云ふのである。一行はへ又又長崎行の舟へよに乗つて）た。長崎へよに着いたのは十一月へ八日のへ朝朝である。舟引地町の紙屋と云ふ家へよに泊（ま）つて、町年寄へ福福田某へよ尋に尋人の事をへ頼頼

んだ。こへこへで聞※けば、へ勸^{くわんぜんじん}勸^{かん}善寺の客へ僧^{そう}僧^{そう}はいよへ敵^{かたき}敵^{かたき}らしく思はれる。それは紀州へ産^{さん}産^{さん}のもので、何か人目を憚^{はば}るわけがあると云つて、門外不出で暮^くしてゐると云ふのである。へ親^{しんせつ}親切な町年寄は、へ若^も若^もし取り逃^にがしてはならぬと云つて、盜賊方^{たうぞくかた}へをへ二人^{ふたり}同行させることへよにした。町で劍^{けん}術^{じゆつ}術師範^{しはん}をしてゐる小川某^{をがはらう}と云ふものも、町年寄^{まちねい}の話を聞※いて、是非其場^{ぜひそのば}へよに立ち會つて、場合^{ばあひ}へよに依つては助太刀^{すけだち}がしたいと申し(中)込んだ。

九へ郎^{ろう}郎^{ろう}右へ衛^ゑ衛門^{もん}、宇へ平^{へい}平の二人は、大村^{おほむら}家の侍^{さむらい}で棒^{ぼう}の修行^{しゆぎやう}(がしたいと)を懇望^{こんぼう}するものと云つて、勸善寺^{くわんぜんじ}へよ弟^{でい}に弟子入^{でしりやう}の事を言ひ入れた。客^{かき}へ僧^{そう}僧は承引^{しょういん}して、あすの巳^みの刻^{くわく}へ刻^{くわく}に面會^{めんわい}しようと云つた。二人は喜び勇^{よろこ}んで、へ文^{ぶん}文吉^{きち}を連れて寺^{てら}へよ往^ゆに往^ゆく。小川^{をがはら}とへ盜^{たう}盜賊^{ぞく}方^{かた}の二人とも跡^{あと}へよに續^{つづ}く。さてへ文^{ぶん}文吉^{きち}へよに

「護持院原の敵討」森嶋外自筆原稿

(相)合へ図^ず圖をへ教^{をし}教へて客^{かき}へ僧^{そう}僧に面會^{めんわい}して見ると、似^にも寄^よらぬ人^{ひと}(だと云ふことで)であつた。(比)やうへ其場^{そのば}を取り繕^{つくろ}つて寺を出^でたが、皆へ忌^{いまく}忌々^{いまく}しがる中へよに、宇へ平^{へい}平は殊^{こと}へよに落膽^{らくたん}した。

一行^{かう}は(大へ)へ福^{ふく}福田^{ふくた}、小川^{をがはら}等へよ禮^{れい}に禮を言つて(熊本を)へ長崎^{ながさき}を立つて、大村^{おほむら}へよに五日(と)ゐて佐賀^{さが}へ出^でた。此^{この}(頃)時九^{とき}へ郎^{ろう}郎^{ろう}右へ衛^ゑ衛門^{もん}が足痛^{そくつう}をへ起^{おこ}して、へ杖^{つゑ}杖を衝^ついて歩^{ある}くやうへよになつた。筑後國^{ちくごのくに}では久留米^{くろみ}を五日へ尋^{たづ}尋ねた。筑^{ちく}前^{ぜん}前國^{のくに}では先^まづ太宰府^{だざいふ}天満宮^{てんまんぐう}へよ參^{さん}に參詣^{さんぎ}してへ祈^{いの}祈願^{きがん}をへ籠^{かご}籠め、博多^{はくた}、へ福^{ふく}福岡^{ふくおか}へよに二日ゐて、へ豊^{とよ}豊前^{ぶんぜん}前國^{のくに}小倉^{こくら}(へ出^でて)から舟へよに乗^のつ(た)て九州^{しゅう}を離^{はな}れた。

長門國^{ながのくに}下關^{しもせき}へよに舟^{ふね}で渡^{わた}つたのが十二月六日であつた。へ雪^{ゆき}雪は降^ふつて来る。九へ郎^{ろう}郎^{ろう}右へ衛^ゑ衛門^{もん}

衛門※の足痛は次第へよに重るばかりである。とう
く字へ平平と文文吉とで勧めて、九郎郎
右衛門衛門を一旦姫姫路へ帰歸することへよ
にした。九郎郎右衛門衛門は涇澁りながら
下關※から舟へよに乗つて、十二月十二日の朝朝
磨磨國室（の）津へよに着いてた。そし
て其日のうちへよ姫に姫路の城下へ平平の町の稲
稲田屋へよに這入つた。《これは》本意を遂遂
げるまでは、飽飽くまでも旅中の心得※でゐて、
《企てた事を果すまでは》《自》倅の宅へよには帰
歸らぬ《と云ふ考からの事》のである。』27
字へ平平は九郎郎郎右衛門衛門をへ送送
つて置いて、十二月十日へよ文文に文吉を連れて下關を
立つた。それから周周防國宮市へよに二日ゐて、
室積を経て、岩國の錦帯帯橋へ出た。そこを三日搜
して、舟で安藝國宮へ嶋嶋島へ渡つた。廣嶋島に
へ八日ゐて、備後國へよに入り、尾の道、鞆へよ

に十七日、福福山へよに二日ゐた。それから備
前前國岡山を経て、九郎郎郎右衛門衛門の見
舞旁、姫姫路へよに立ち寄つた。
字へ平平、文文文吉が、姫姫路の稲稲田屋
で九郎郎郎右衛門衛門と再會したのは、天保六
年乙未の（年）歳正※月二十日であつた。丁度其時
廣岸山の《神》神主谷口某と云ふものが、怪しい非人の
事を知らせてくれたので九郎郎郎右衛門衛門が
《文》文吉を見せへよに遣つた。（怪まれたのは）非
人は石見産産だと云つてゐてた。人へよに
怪まれたのは脇差を持つてゐたからであつた。併し敵
敵ではなかつた。
九郎郎郎右衛門衛門の足はまだなかく直らぬ
ので、字へ平平は二月二日へよ文文に文吉を連れて
《姫》姫路を立て、五日へよ大坂坂へよに
着いた。宿は阿波座おくひ町の攝津《の》國屋である。
然るへよに九郎郎郎郎右衛門衛門は二人を立たせ

てから間※もなく、足が好くなつて、十四日へよには
姫路を立て、明石から舟へよに乗つて、大
坂へ追ひ掛けて往つた。

三人は攝津の國屋へよに泊つて、所々を尋ね廻るうちへよに、路銀は全くと盡き尋ね廻るうちへよに、路銀は全くと盡き
《てしま》さうへよになつた。そこで宿屋の主人の世話で、九郎右衛門は按摩よ摩になつた。按摩よ摩になつたのは、柔術の心得があるから、按摩の出来ぬ筈はないと云ふのであつた。淡嶋島の神主と云ふのは、神社で神に仕へるものではない。胸へよに小さい宮を懸けて、それへよに紅で縫つた括猿などを吊り下げ、手へよに鈴を振つて歩く乞食である。
その時九郎右衛門、宇平の二人はへよ文吉へよに暇を遣らうとして、かう云つ

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

た。これまでも我々は只お前前と寝食を共にへよにすると云ふ丈で給料と云ふものも遣らず、名のみ家來へよにしてゐたのをへよに、お前前は好く辛抱して勤めてくれた。併しもう日本全國をあらかたへ遍歴して見たが、敵敵はなか／＼見附からない。此按排では我々が本意を遂げるのは、いつの事か分らない。事へよによつたら此儘恨を呑んで道路へよにのたれ死をするかも知れない。お前はこれまで詞で述べられぬ程の親親切を盡してくれた（か）のだから、どうも此上一しよへよにあてくれとは云ひ兼ねる。勿論敵敵の面體を見識識られぬ我々は、お前前に別れては困るへよに（は）違ないが、最早是非へよに及ばない。只運を天へよに任せて、名告り合ふ日待つより外ない。お前は忠實此上もない人であるから、これから主取をしたら、どんな立身も出来よう。どうぞこへよに別れてくれと云

ふのであつた。

九〈郎〉郎右〈衛〉衛門※は〈兼〉兼て宇〈平よ〉

平に相談して置いて、〈文〉文吉を呼んで《申し渡》

此申渡をした。宇〈平〉平は側で腕組をして聞※いて

ゐたが、〈涙〉涙は頬を傳つて流れてゐる。

〈黙〉黙つて衝つ伏して聞※いてゐた〈文〉文吉

は、詞の切れるのを待つて、頭を擡げた。〈睜〉睜つた

目は異様〈よ〉に赫いてゐる。そして一聲「檀檀那、

それは違ひます」と叫んだ。心は激して詞はしどろで

あつたが、〈文〉文吉は大〈凡〉凡こんな事を言つた。此

度の奉公は當前の奉公ではない。〈敵〉敵討の〈伴〉供

〈よ〉に立つからは、命はないものである。お二人が首

尾好く本意を〈遂〉遂げられれば好し、萬一〈敵よ〉敵

に多勢の悪者でも〈加護〉荷擔して、返討〈よ〉にでも

逢はれれば、一しよ〈よ〉に討たれるか、其場を逃れ

て、二重〈を〉の仇を討つかの二つより外ない。足腰の

立つ間※は、よしやお暇が出て、影の形〈よ〉にそふ

やう〈よ〉に離れぬと云ふのであつた。

流石の九〈郎〉郎右〈衛〉衛門※も詞の返しやうが

なかつた。宇〈平〉平は〈蕪〉蕪つた思をした。』³⁰

それからは三人が攝津の國屋を出て、木賃宿へ

起臥に起臥（し）すること〈よ〉になつた。も

うどこをさして〈往〉往つて見ようと云ふ所もないの

で、只已む〈よ〉勝に勝る位の考で、（僥倖を願）

〈神〉神佛の加〈護〉護を念じながら、日ごと〈よ〉に

市中を徘徊してゐた。

そのうち大坂の〈咳〉に咳逆が流行して、木

賃宿の〈は〉も〈咳〉咳をする人だらけ〈よ〉になつた。

三月の初〈よ〉に宇〈平〉平と〈文〉文吉とが〈感

感染して、熱を出して〈寝〉寝た。九〈郎〉郎右〈衛

衛門は自〈分〉分の貰つた錢で、三人が一口〈死〉宛で

も粥を啜るやう〈よ〉にしてゐた。四月の初〈よ〉に二

人が本復すると、こん度は九〈郎〉郎右〈衛〉衛門が

〈寝〉寝た。體は〈嚴疊〉嚴疊でも、年を取つてゐるの

で、容體が二人より悪い。人の好い醫者を〈頼〉頼んで見て貰ふと、傷〈寒〉寒だと云つた。それは熱が高いので、諺語〈へよ〉に「こら待て」だの「逃がすものか」だのと〈叫〉叫んだからである。

本質宿の主人が迷惑がるのを、〈文〉文吉が〈なだ〉有め〈賺〉賺して、病人を介〇してゐるうち〈へよ〉に、

病附の〈急〉急劇であつたわり〈へよ〉に、〈早く〉〈五〉

九〈郎〉郎右〈衛〉衛門※〈が〉の〈強〉強い體は

少い日數で病氣〈へよ〉に打ち〈勝〉勝つた。』³¹

〈五〉九〈郎〉郎右〈衛〉衛門の恢復したのを、

〈文〉文吉は喜んだが、こ〈へよ〉に今一つの《難

儀》心配が出来た。それは不斷から機〈嫌〉嫌の變り易

い字〈平〉平が、病後〈へよ〉に際立つて精〈神〉神の變

〈調〉調を〈呈〉呈して來たことである。

字〈平〉平は常はおとなしい性である。それ〈へよ〉に

どこか世馴れ〈ない〉ぬ、ぼんやりした所があるの

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

で、〈五〉九〈郎〉郎右〈衛〉衛門は〈若〉若殿と綽號を付けてゐた。併し此〈若〉若者は柔い〈草〉草葉の風〈へよ〉に靡くやう〈へよ〉に、何事※〈へよ〉にも〈ひど〉〈強〉強く〈感〉感動する。そんな時〈へよ〉には常着い〈顔〉顔に紅が〈潮〉潮して來て、別人のやう〈へよ〉に能辯〈へよ〉になる。それが過ぎると反動が來て、沈鬱〈へよ〉になつて、頭を低れ手を拱いて〈默〉默つてゐる。

字〈平〉平が此性質〈へよ〉には、叔〈父〉父も〈文〉

文吉も慣れてゐたが、今の様子は《餘程》それと《は》

も變つて來てゐるのである。〈朝〉朝夕〈平穩〉平穩な

時がなくなつて、始〈終〉終興奮してゐる。苛々した

やうな起居振舞をする。それ〈へよ〉にいつものやうな發

揚の〈状〉状態〈へよ〉になつて、〈饒〉饒舌

をすることは³²《絶》絶えて無い。〈寧〉寧沈

〈默勝〉默勝だと云つても好い。只興奮してゐるため〈へよ〉

に、瑣細な事〈へよ〉にも腹を立てる。〈又〉又何事も

ないと、わざ／＼人を挑んで詞尻を取つて、怒の動機を作る。さて怒が生じたところで、それをあらはへよに發動させずへよに、口小言を言つてへ切へ切ねてゐる。

かう云ふ状態が二三日續いた時、へ文へ文吉は

へ五へ九へ郎へ郎右へ衛へ衛門へよに言つた。「へ若檀へ若檀那の御※様子はどうも變ぢやございせんか。」

へ文へ文吉は字へ平へ平の事を、(五郎)へ文吉は「いつかへ若檀へ若檀那と云ふ(やう)ことへよになつてゐた。

へ五へ九へ郎へ郎右へ衛へ衛門は氣へよにも掛けぬらしくへ笑へ笑つて云つた。へ若へ若殿か。あの御※

機へ嫌へ嫌の悪いのは、旨い物でも食はせると直るのだ。」

へ五へ九へ郎へ郎右へ衛へ衛門のかう云つたのも無理は(無)ない。三人は目ごとへよ顔へ顔を見合つてゐて氣が附かぬが、(貧乏)困窮と(病氣)病痾とへ羈へ

羈旅(の)との三つの苦艱を嘗め盡して、(誰も誰も)どれもこれも江戸を立つた日の俵はなくなつてゐるのである。

へ文へ文吉が此話をした(ヨ)翌日のへ朝へ朝であつた。(合宿)相宿のものがそれへ稼へよに出

た跡で、字へ平へ平はへ五へ九へ郎へ郎右へ衛へ衛門のへ前へ前に膝を進めて、何か言ひ出しさうへよにしてへ又黙へ又黙つてしまつた。

「どうしたのだい」と叔へ父へ父が云つた。

「實は少し考へた事があるのです。」

「なんでも好いから、さう云へ。」

「をぢさん。あなたはいつへ敵へ敵に逢へると思つてゐますか。」

「それはおへ前へ前へよにもへ分へ分かるまいが、己にもへ分へ分からんのう。」

「さうでせう。蜘蛛は(網／いを)網を張つて蟲の掛かるのを待つてゐます。あれはどの蟲でも好い(から、

のだから、〈平〉平氣で待つてゐるのです。〈若〉若し一匹の〈極〉極まつた蟲を取らうとするのだと、蜘蛛の網は役〈よ〉に立ちますまい。わたしはかうして〈僥〉僥倖を當〈よ〉にしていつまでも待つのが厭〈よ〉になりました。」

「随〈分〉分己もお〈前〉前も方々歩いて見たぢやないか。」

「えゝ。それは歩く〈よ〉には歩きましたがへ、へ」と云ひ掛けて、宇〈平〉平は『34 黙』黙つた。

「はてな。歩く〈よ〉には歩いたが、何が惡かつたと云ふのか。構はんから言へ。」

宇〈平〉平は矢張〈黙〉黙つて、(え)叔〈父〉父の顔顔をぢつと見てゐたが、暫くして云つた。「をぢさん。わたし共は随〈分〉分歩く〈よ〉には歩きました。併し歩いたつてこれは見附からないのが當〈前〉前かも知れません。ぢつとして網を張つてゐたつて、來て掛かりつこはありませんが、歩いへたつてゐたつて、打つ

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

附からないかも知れません。それを先へ先へと考へて見ますと、どうも妙です。わたしは變な心持がしてなりません。」宇〈平〉平は〈又〉又膝を進めた。「をぢさん。あなたは どうしてそんな〈平〉平氣な様子をしてゐられるのです。」

宇〈平〉平(が最後の)の此詞を、(聞※いた時、)叔父〈父〉父は非常な〈注〉注意の集中を以て聞※いてゐた。「さうか。さう思ふのか。よく聴けよ。それは〈武〉武運が拙くて、〈神〉神にも佛〈よ〉にも見放されたら、お〈前〉前の云ふ通だらう。『35 人間※はさうしたものではない。〈腰〉腰が〈起〉起てば歩いて捜す。病氣〈よ〉になれば〈寝〉寝てゐて待つ。〈神〉神佛の加〈護〉護があれば、〈敵〉敵には(きつと)いつか逢はれる。歩いて行き合ふかも知れぬが、〈寝〉寝てゐる所へ來るかも知れぬ。」

宇〈平〉平の口角〈よ〉には微かな、(醜い)〈嘲〉嘲るやうな微〈笑〉笑が閃いた。「をぢさん。あなたは

「神」神や佛が本當「へよ」に助けてくれるものだと思つてゐますか。」

「五」九「郎」郎右「衛」衛門は物「へよ」に動ぜぬ男なの「へよ」に、これを聞※いた時「へよ」には一種の氣味悪さを「感」感した。「うん。それは「分」分からん。「分」分からんのが「神」神。佛だ。」

宇「平」平の態度は（平静□）不思議「へよ」に恬然としてゐて、いつもの興奮の（跡もない）「状」状態とは違つてゐる。「さうでせう。「神」神佛は「分」分からはぬものです。實はわたしはも□今までしたやうな事「へよ」を罷めて、わたしの「勝」勝手「へよ」にしようかと思つてゐます。」

「五」九「郎」郎右「衛」衛門の目は（腫が）大きく開いて、眉が高く揚がつたが、見る／＼「蒼」蒼ざめた「顔」顔に血が升つて、「拳」拳が固く握られた。「ふん。そんなら「敵」敵討は罷「へよ」にするのか。」

か。』36

宇「平」平は軽く微「笑」笑んだ。（珍らしく）おこつたことのない叔「父」父をおこらせたの「へよ」に満足したらしい。「さうぢやありません。龜藏は「憎」憎い奴ですから、「若」若し出合つたら、ひどい目「へよ」に逢はせて遣ります。だが搜すのも待つのも駄目ですから、出合ふまではあいつの事なんか考へず「へよ」にゐます。わた（くし／し晴か）しは「晴」晴がましい「敵」敵討をしようとは思ひませんから、助太刀もいりません。「敵」敵が知れば知れる時知れるのですから、見（張）「識」識人もいりません。「文」文吉は（けふ）これからあなたの家來「へよ」にしてお「使」使下さいまし。わたしは近い内「へよ」にお暇をいた（しま）す積です。」

九「郎」郎右「衛」衛門が怒は發するや否や忽ち解けて、宇「平」平の此詞を聞※いてゐる間※「へよ」に、いつもの優しいをぢさん「へよ」になつてゐた。只何事をも「強」強ひて「笑」笑談「へよ」に取りなす癖の

をぢが、珍らしく生へ真眞面目へよになつてゐる）
ただけである。

宇〈平〉平が席を起つて、木賃宿の（□）〈縁縁側を降りる時、叔父は「おい、（宇平、待て」と〈声〉聲を掛けたが、宇〈平〉平の姿は（もう）（どこか往つてしまつた。）もう見えなかつた。併し宇〈平〉平がこれ切ゐなくならうとは、叔父父は思は（ずよる）なかつた。』37

夕方夕方に文吉が〈帰歸つたので、九〈郎郎右衛門衛門は近所へ〉往つて宇〈平〉平を〈尋尋ねて（連れて）来いと云つた。宇〈平〉平は折々町の〈若若い者の象棋をさしてゐる所などへ〉往つ（て）た。最初は〈敵敵の手掛へか〉りを聞※き出さうとして、雑談へよに耳を傾けてゐたのだが、後へよには只何※となしへよにそこへ往つて（で）話（を）してゐたことも（してゐたのである。

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

〈文文吉はさう云ふ家を〉尋ね（て見）た。併し（文）宇平は（どこへよ）にもゐなかつた。其〈晩晩には遅くなるまで九〈郎郎右衛門衛門が〉起きてゐて、宇〈平〉平が帰るか帰るか待つてゐたが、（の）〈帰歸るのを待つたが、とう／＼〉〈帰歸らなかつた。

〈文文吉は宇〈平〉平を〉尋ねて歩いた序へ（に、ふと玉造（の）〈豊豊空〉稻荷（様）の〈霊霊験の話を聞※いた。どこの誰の〉親親の病氣が直つたとか、どこの誰は迷子の居所を知らせ貰つたとか、〈若若い者共が〉評判評判し合つてゐたのである。〈文文吉は九〈郎郎右衛門衛門へよ〉にことわつて、翌日行水（を）して身を潔めて、玉造（へ往）をさして出て行つた。〈敵敵のありかと宇〈平〉平の行方とを伺つて見ようと思つたのである。

〈稻稻荷の〉社社の〈前前〉前に来て見れば、

大勢の人が（集まつ）出入してゐる。（近所）『38』

數へられぬ程多く立てゝある、（戸）赤い鳥居が

（疊）重なり合つてゐて、群集はその赤い洞の中、《を

《往つたり來たりして》押し合つて》で蠢いてゐるので

ある。外《廻り廻り》には茶店が出来てゐる。汁

《粉》粉屋がある。（居□）甘酒屋がある。赤い洞の

兩側《よ》には見せ物小屋やらおもちゃ店やらが出来

てゐる。洞を《潛》潜つて《社よ》社に這入ると、《神

神主がお初穂と云つて金を受け取つて、番號札をわた

す。伺を立てる人《が》を其番號順《よ》に呼び入

れ《られ》るのである。

《文》文吉は持つてゐただけの錢を皆お初穂《よ》

に上げた。併し順番がなか／＼來ぬので、とう／＼曰の

《暮》暮れるまで（腹をへらし）《て》待つ《てゐ》た。

何※も食はず《よ》に、腹がへつたとも思はず《よ》

にゐたのである。《暮》暮六つが鳴ると、《神》神主が

出て「《残》残りの番號の（人）方《が》は明《朝》

朝お出なさい」と云つた。

次の日《よ》には未明《よ文》に文吉が《社》社

へ《往》往つた。番號順は《文》文吉より《前》前なの

《よ》に、まだ來てをらぬ人があつたので、《文》文吉

は思つたより早く呼び出された。《文》文吉が沙《よ》

に額を埋めて拜みながら待つてゐる『39』と、これも思つ

たより早く、《神》神主が出て御※託宣を（申し渡）取

り《次》次いだ。「初の《尋》尋人は春頃から東國の繁

華な土地《よ》にゐる。後の《尋》尋人の事は御※

託宣が無い」と云つた。

字《平》平は玉造（た）から《急》急いで《歸》歸

つて、御※託宣を九《郎》郎右《衛》衛門《よ》に

話した。

九《郎》郎右《衛》衛門※はそれを聞※いて云つ

た。「さうか。東國の繁華な土地と云へば江《戸》戸だ

が、いか《よ》に龜藏が横着でも、うかと江《戸》戸

には《戾》戾つてゐまい。成程我々が《敵》敵討

討

討

「へ」に「餘」餘所へ出たと云ふことは、〈噂〉噂に聞いたかも知れぬが、それへにしても外へに親類で氣を付けてゐるものもあるのだから、どうも江戸戸（へ）（へ）に「戻」戻つてゐさうへに「は思はれぬ。」ない。「おい。文吉。」お前前は「神」神主へ一杯食はされたのぢやないかい。後の「尋」尋人が知れぬと云ふのも、お初穂がもう一度貰ひたい（《のぢやないか》）のかも知らん。」

「文」文吉はひとく物體ながつて、九郎郎右衛門衛門※の詞を遮るやうへにして、どうぞさう云はずへに御託宣を信ずる氣へになつて貰ひたいと頼頼んだ。』40

九郎郎右衛門衛門※は云つた。「いや。己は「稻」稻荷※様を疑ひはせぬ。只どうも江戸戸ではなささうへに思ふのだ。」

かう云つてゐる所へ、木賃店宿の亭主が來た。今家主の所へ呼ばれて、江戸戸から來

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

た手紙を（受け取つて見）貰つたら、山本様へのお手紙であつたと云つて、一封の書「狀」狀を出した。九郎郎右衛門衛門※が手へに受け取つて、（見ると）「山本字「平」平殿、（酒／山本（同）九郎右衛門※殿）同九郎郎右衛門衛門※殿、櫻井須木賃宿（よゐ）でも主従の「禮」禮儀を守（つてゐる）る。」文吉（も）ではあるが、〈兼〉兼て聞※き知つてゐた後室の（お）里からの手紙は、（何事）なんの用事かと（と）氣が「急」急いて、九郎郎右衛門衛門※が「封を切つて」披く手紙の上へに、乗り出すやうへにせずへにはゐられなかつた。

「敵」敵討の一行が立つた跡で、故人三右衛門衛門※の（妻の）未亡人は、里（親）方櫻井須木賃右衛門衛門の家で持病（の頭痛）の直るのを待つ（てゐたが）。た。暫くすると、難儀へに遭つ

(た)てから時が立つたのと、四邊が「静よ」静になつたののため「よ」に、(實)「やうやう」頭痛(もしなく)が「餘」餘程輕くなつた。實(の)(兄)弟(の)須「磨」磨右「衛」衛門※は⁴¹「親」親切「よ」にはしてくれるが、世話「よ」にばかりなつてもゐる「よ」に、
くいで、未亡人は「餘」餘り「忙」忙しくない奉公口をと云つて搜して、とう／＼小川町 組 橋際の「寄合」
「高」高家衆大澤右京大夫基昭が「奥よ」奥に「使」使はれること「よ」になつた。

字「平」平の姉りよは叔母「壻」婿原田方「よ」に引き取られて「ゐて」から、「墓参」墓參の時など「よ」には、櫓を賣る「寺男の女房」姫の世間※(話)話「よ」にも耳を傾け「るやうよし」て、「敵」敵のありかを聞※き出さうとしてゐる「うちよ」だが、いつか忌も明けた。そこで所々「よ」に一二箇月づ「つ」奉公してゐたら、自然手掛「か」りを得るたつきにもならうと思ひ立つて、最初は本所の或る家「よ」に住※

み込んだ。これは遠い「親」親戚「よ」に當るので、奉公人や客「分」分やら「分」分やら「分」分からね待遇を受けて、萬事の手傳をしたのである。「次よ」次に(は)赤坂の堀と云ふ家の「奥よ」奥に、大小母が勤めてゐたので、そこへ手傳「よ」往つた。「次よ」次に(は)「麻」麻布の或る家「よ」に奉公した。「次よ」次に本「郷」郷弓町の寄合衆本多「帯」帯刀の家來「よ」に、遠い「親」親戚があるので、そこへ手傳「よ」往つた。こんな風「よ」に奉公先を取り替へて、天保六年の(夏よ)春からは「神田」御茶の水の寄合衆酒井龜之進の「奥よ」奥に勤めてゐた。⁴²此酒井の妻は淺「草」草の酒井石見守忠方の娘である。

未亡人よりも「敵」敵のありかを聞※き出さうと思つてゐて、中「よ」にもりよは晝夜それ「よ」に心を砕いてゐたが、どうしても手掛「か」りがなかつた。い。九「郎」郎右「衛」衛門※や字「平」平から(も)は「便」便が「絶」絶々「よ」になるの「よ」

に、江へ戸へ戸でも（なんの）何一つしでかした事（も）がない。《ので》女子達の心細さは言はうへ様（やう）様がなかつた。

月日が立つてへへ、天保六年の五月（雨の頃）の初（はじめ）日（ひ）が立つてへへ、或る日未亡人の里方の櫻井須（す）磨（ま）右（みぎ）衛（ゑ）衛門（ゑもん）が浅（あ）草（くさ）草（くさ）の観（かん）音（おん）参（ま）詣（まが）して、茶店（ちやみせ）の（の）へへに腰（こし）を掛けてゐると、今まで歇（やす）んでゐた雨（あめ）がへへ又一しきり降（ふ）つて來（き）た。其時茶店（ちやみせ）の軒（のき）へ驅（か）け込んで雨（あめ）を避（さ）けるへへ（男（おとこ）がある。仲間（な）※）になるのを待（まち）ながら、軒（のき）へへに立つてこんな話（はなし）をした。

一人（ひとり）が云（い）つた。「おへ前（まへ）へ前に話（はなし）さうと思（おも）つて忘（わす）れてゐたが、（きのふ）ゆへうふべの事（こと）だつた、丁度（ちやうど）今のやうへへに（大川端（おほがわはた））神（かみ）田（だ）で雨（あめ）へへに降（ふ）り出（い）だされて、酒（さけ）問（もん）※屋（や）のへへ戸（こ）の（閉（ふ）※）へへ締（し）まつてゐる外（ほか）でしやがんでゐると、そこへ（駈（か））

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

驅（か）け込んだ奴（やつ）がある。見（み）れば、あの酒井様（さかゐさま）へへにゐた龜（かめ）ぢやあねえか。己（おれ）はびつくりしたよ。好（よ）くづうくしくへ帰（かへ）歸（かへ）つて來（き）やがつたと思（おも）（つて）ひながら、おい、龜（かめ）と聲（こゑ）を掛（か）けたのだ。すると、えと云（い）つて振（ふ）り向（む）いたが、人違（ひとちがひ）をしなさんな、おいらあ虎（とら）と云（い）ふもんだ（へ）と云（い）つ（て）といて、まだ雨（あめ）がどしどし降（ふ）つてゐるのへへに、驅（か）け出（だ）して行（い）つてしまやがつた。」

今（いま）一人（ひとり）が云（い）つた。「ぢやあへへ又（また）歸（かへ）又（また）歸（かへ）つてゐやがるのだ。太（お）え奴（やつ）だなあ。」

須（す）磨（ま）右（みぎ）衛（ゑ）衛門（ゑもん）は二人（ふたり）へへに聲（こゑ）を掛（か）けて、その龜（かめ）と云（い）ふ男（おとこ）は何（なん）者（もの）だと問（と）※うた。二人（ふたり）は侍（さむらい）へへに糺（ただ）されるのをひどく當惑（たうわく）がする様子（ようす）であつたが、をどしの（幕（まく））へ暮（くれ）ゝ暮（くれ）に大手（おほて）の酒井様（さかゐさま）の（氏（うぢ））お邸（やしき）で惡（わる）い事（こと）をして逃（に）げた仲間（な）※の龜藏（かめざう）の事（こと）だと思（おも）つた。そして（最（さい）イ）最後（さいご）へへに「なへへに、ちよいと見（み）たのですから、全（ま）く人違（ひとちがひ）で、本當（ほんたう）へへに虎（とら）と云（い）ふ（もの）も」のだつたかも知（し）れませんと（言（い）ひ足（たり））詞（ことば）を濁（にご）した。只（ただ）

見掛けたと云ふだけの此二人を取り押さへても、別へよに役へよに立ちさうで《ないのと》はなく、《又》又荒立てへて、龜藏へよに江へよ戸を逃げられ（てはならぬと思）《るかも知れぬののためよ》てはならぬと思つて、須磨磨右衛門へよは穩※《便》便に二人を立ち去らせた。

大坂阪で九郎郎右衛門衛門が受け取つた《手紙》のは、櫻井から龜藏（らしい男）の江へよ戸にある《の》ことを知らせ（て）へよに遣つた手紙で（あつた。）ある。

《文》文吉はすぐへよに玉造へお《禮參》禮參りへよ往に往つた。九郎郎右衛門衛門は《文》文吉の《歸》歸るのを待つて、手へよ分をして大坂阪の出口々々を（尋ねた。）《廻》廻つて見た。宇平平の行方を街道の駕籠籠の立場、港の船※問屋へよに就いて《尋》尋ねたのである。（い）併

しそれは皆徒勞であつた。

九郎郎右衛門衛門は是非なく甥の事を思ひ棄てて、江へよ戸へ立つ《支》支度をした。路銀は《費》使ひ果しても、用心金と衣類腰の物とへよには手は

（着け）なずよゐた。ない。九郎郎右衛門衛門は《花》花色木綿の單物へよに茶小倉の《帶》帶を《締》締め、（て）紺《麻》麻紵の野羽

織織を着（た。持物）て、兩刀を（一）手挟んだ。持物は鳶色ごろふくの懷中物、《單》鼠木綿の鼻紙袋、十手早繩である。《文》文吉も取つて置いた

《花》花色の單物へよに御納戸戸小倉の《帶》帶を《締》締めて、十手早繩を懷中した。

木賃宿の主人へよには《禮》禮金を遣り、攝津の國屋へは挨拶へよに立ち寄つて、九郎郎右衛門衛門主従は六月二十八日の夜舟で、（伏見から津へ渡つた。三十日へよに大暴風で《坂》阪の下へよ半）に半日留められた外は、道中（何）なんの《障

障もなく、二人は七月十一日（一）の夜品川へよ
に着いた。

十二日（よは）寅の刻に二人は品川の宿を
出て、浅草の遍立寺へ往つて、
草鞋の儘で三右衛門の墓へよに
参つた。それから佐住持へよに面會して、
一晩の夜旅の疲を休めた。

翌十三日は孟蘭盆會で、（ある。）親戚
のものが墓へ参る（のよ）日である。九
郎右衛門は佐住持へよに、（口留をし
て、）自分達の來たのを知らせてくれるなど（云
つ）口止をして、自分と文吉とは庫裡へよ
に隠れてゐた。佐住持（が）はなぜかと問うたが、
九郎右衛門は只「謀は密なるをたふと
ぶと申しますからな」と云つた（限）切り、（另）外
の話を「よ」にまぎらした。（り）墓へ参るに來たの
は原田（や）櫻井の女房達で、嚴しい武

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

武家奉公をしてゐる未亡人やりよは來なかつた。

戌の下刻になつた時、九郎右衛門は
文吉へよに言つた。「さあ、これから搜
しへよに出るのだ。見附けるまでは（毎日出る／積で
／足の元まで歩く）足を揃へ粉粉木へよにして歩
くぞ。」

遍立寺を旅支度の儘で出た二人は、先づ
浅草の觀音をさして往つた。
雷門近くなつた時、九郎右衛門が
文吉へよに言つた。「どうも坊主へよにはな
つてをらぬらしいが、どんな風體でゐても見逃がすな
よ。だがどうせ立派な形はしてゐないのだ。」
境内を廻つて、觀音を拜ん
で、見識人を櫻井へよに逢はせて貰つた「禮
を言つた。それから藏前を兩國へ出た。けふは
蒸暑いのに、花火があるので、涼

旁見物へよに出た人が押し合つてゐる。提灯へよに火を附ける頃、二人は茶店で暫く休んで、汗が少し乾くと、へ又へ又歩き出した。

川も見えず、舟も見えぬ。玉や鍵やと叫ぶ時、群(は豆)集(は)が項を(反らせ)反らして、群集の《頭の》上の《花》花火を見る。《だけである。》西の下《刻》刻と思はれる頃であつた。《文》文吉が

背後から九《郎》郎右《衛》衛門※の袖を引いた。九《郎》郎右《衛》衛門※は《文》文吉の《視》視線を辿つて、左手一步前を行く、背の高い男を見附けた。

古びた中形木綿の單物へよに、古びた《花》花色縞(十)博多の《帯》帯を《締》締(めて)めてゐる。

二人は《黙》黙つて跡を附けた。月の明るい《暁》夜である。横山町を曲る。鹽※町から大傳馬町へよに出る。本町を横切つて、石町河岸から《龍》龍

閑※橋、《鎌》鎌倉河岸へよに掛る。《次》次第へよ

に人通が薄らぐので、九《郎》郎右《衛》衛門は手拭を出して頬被をして、わざとよろめきながら歩く。《文》文吉はそれを扶ける振をして附いて行く。』47

《神》神田橋外元《護》護持院二番原へよに來た時は丁度子の《刻》刻頃であつた。《往》往來はもう全く

《絶》絶えてゐる。九《郎》郎右《衛》衛門が《文》文吉へよに《見》目ぐはせした。二つの體を一つの意

志で働かすやうへよに、二人は背後から目ざす男へよに飛び着いて、《黙》黙つて兩腕をしつかり《攫》攫んだ。

「何をしやあがる」と叫んだ男は、振り放さうと身をもがいた。

無言の二人は釘《拔》拔で釘を抜んだやうへよ腕《腕》を《放》放さない。／いで、／ずる／くと《攫》攫んだ、もがく男(は)を道傍の立木の陰へ、引き《摩》摩つて《往》往(かれた。)つた。

九《郎》郎右《衛》衛門は《強》強烈な火を《節》節光板で遮つたやうな聲で云つた。「己はをとどしの

〔幕〕暮お主へよに討たれた山本三右衛門の
〔第〕弟九郎郎右衛門だ。國所と名
〔前〕前を言つて、覺悟をせい。」

「そりやあ人違だ。おいらあ泉州へ産で、虎
藏と云ふものだ。そんな事をした覺はねえ。」

〔文〕文吉が（ずつと）〔顔〕顔を覗き込んだ。「お
い。龜。目の下の黒痣まで知つてゐる己がある。そ
んなしらを切るな。」

男は〔文〕文吉の〔顔〕顔を見て、草葉が霜へよ
に萎へびれるやうへよに、がくりと』⁴⁸首を低れ
た。「あへあへ。〔文〕文（さんか。）公か。」

九郎郎右衛門はこれ〔丈〕丈聞※いて、
手早く懷中から早繩を出して、男を縛つた。そして
〔文〕文吉へよに言つた。「もうこへこへは好いか
ら、（急いで）お茶の水の酒井龜之進様のお邸へ〔往〕往
つてくれ。口上はかうだ。手〔前〕前は御※當家のお
〔奥〕奥に勤めてゐ（ます）るりよの宿許から

〔參〕參りました。母〔親〕親が霍亂で夜明まで持つま
いと申すことでござります。どうぞ格別の思召でお暇を
下さつて、一目お逢はせ下さるやうへよにと、さう云
ふのだ。〔急〕急げ。」

「は」と云つて、〔文〕文吉は錦町（の戸を／筋を）
の〔方〕方角へ驅け出した。

酒井龜之進の邸では、今〔宵〕宵（は）〔奥〕奥のひ
けが遅くて、りよはやうへやうへ／＼部屋へよ帰に歸
つて、〔寝巻〕寝巻に着〔換〕換へようとしてゐる所
であつた。そこへ老女（から）の〔使〕使が呼びへよ
に來た。

りよは着〔換〕換へぬうちで好かつたと思ひなが
ら、すぐへよに（附いて老女の部屋）〔起〕起つて上
〔草〕草履を〔穿〕穿いて、〔廊〕廊下〔を〕傳へよ
に老女の部屋へ〔往〕往つた。』⁴⁹

老女は云つた。「お〔前〕前の宿から〔使〕使が來て

ゐるがね、母〈親〉親が〈急〉急病だと云ふことだ。

〈盆〉盆ではあり、御※多用の所だが、〈親〉親の病氣

は格別だから、(逢)〈帰〉歸つてお出。〈親〉親御へよ

に逢つたら、夜でもすぐへよに(帰/御※當家)お邸

へ〈戻〉戻るのだよ。あすへよになつてから、〈又〉

又改めてお暇を願つて遣るから。」

「難有うございます」と、りよはお〈請〉請をし(た。

そして)て、老女の部屋を(出)すべり出た。

りよは此儘〈往〉往つても好いと考へながら、〈使〉

使とは誰が来たのかと、〈奥〉奥の口へ覗きへよに

出た。御※用を勤める時の支度で、(中)木綿中形の單物

へよに、〈黒〉黒緇子の〈帯〉帯を〈締〉締めてゐた

のである。〈奥〉奥の口でりよは旅〈支〉支度(で)の

〈文〉文吉と〈顔〉顔を見合せた。そして〈親〉親の病

氣が口實だと云ふことを悟つた。

りよと一しよへよ奥に奥を下がつた傍輩が二三

人、物珍らしげへよに〈廊〉廊下へよに集まつて、

(ゐる。)りよが宿の〈使よ〉使に逢ふのを見ようとし

てゐる。

「ちよいと忘物をいたしましたから」と、りよは獨

言のやうへよに云つて、『50 足を早めて部屋へ引き返

した。

部屋の〈戸〉戸を〈内〉内から〈締〉締めたりよは、

〈葛籠〉葛籠の〈蓋〉蓋を開※けた。先づ取り出したの

は着〈換〉換の帷子一〈枚〉枚である。〈次よ〉次に臂

をずつ(と)と底までさし入れて、短刀を一本取り出

した。當番の夜〈父〉父三右衛門が持つてゐた脇

差である。りよは二品を手早く袱紗へよ包に包んで

持つて出た。

〈文〉文吉は〈途中で〉↑《敵》敵を掴まへた(話)

〈顛〉顛末を、りよへよに話しながら、〈護〉護持

院原へ来た。

りよは九〈郎〉郎右衛門衛門へよに挨拶して、

（此場へ）着〈換〉換をする〈餘〉餘裕はないので、短刀だけを〈包〉包の中〈から〉から〈取り〉出した。

九〈郎〉郎右〈衛〉衛門は〈敵〉敵に言つた。

「そこへ来たのが三右〈衛〉衛門の娘りよだ。三右〈衛〉衛門を〈殺〉殺した事と、自〈分〉分の國所名〈前〉前をそこで言へ。」

〈敵〉敵は〈顔〉顔を舉※げてりよを見た。そして云つた。「わたしもうこれまでだ。本當の事を言ひます。なる〈程〉程山本さんへよに創を附けた註のはわたしが、〈殺〉殺しはしません。〈勝負〉勝負事へよ負に負けて金へよに困つたものですから、どうかして金が取りたいと思つて、あんなへまな事をしました。わたしは泉州生田郡上野原村の吉兵〈衛〉衛と云ふものの〈倅〉倅で、名は虎藏と云ひます。酒井様へ（上）小〈使〉使に往み込む時、〈勝負〉勝負事で〈識〉識合へよになつてゐた〈紀〉紀州の龜藏と云ふ奴の名を、口から出任せへよに言つたのです。此外へよに言ふ

ことはありません。どうぞ御※存へ分よ分になすつて下さい。」

「好く言つた」と九〈郎〉郎右〈衛〉衛門は〈答〉答へた。そしてりよと〈文〉文吉とへよに目ぐはせ《を》して（敵）虎藏の繩を解いた。三人が三方から（ぢりく）じりくと詰め寄つた。

繩をほどかれて、しよんぼり立つてゐた虎藏が、ひよいと物をねらふ獸のやうへよに體を〈前〉前屈へよにしたかと思ふと、突然りよへよに飛び掛かつて押し倒して逃げようとした。

其時りよは一步下がつ（たが）て、〈櫓〉柄を握つてゐた短刀で、〈拔〉拔打へよに虎藏を切つた。右の〈肩〉肩尖から乳へ掛けて切り下げたのである。虎藏はよろけた。りよは二（刀）太刀三太刀切つた。虎藏は倒れた。

「見事ぢや。とどめは己が刺す。」九〈郎〉郎右〈衛〉衛門は乗り掛かつて〈吭〉吭を刺した。

九〈郎〉 郎右〈衛〉 衛門は刀の血を虎藏の袖で拭いた。そしてりよ（よは）〈よ〉にも脇差を拭かせた。二人共目は〈涙〉 涙 ぐんでゐた。

宇〈平〉 平が此場〈よ〉に居合せませんのが」と、りよは只一言言つた。

九〈郎〉 郎右〈衛〉 衛門等三人は河岸 〈よ〉にある、本多伊豫守〈忠衛〉 頭取の辻番所へ一屈に屈けた。辻番組合月番西丸御※小納 〈戸鶴〉 戸鶴殿吉之丞〈が〉の家來玉木〈勝三〉 郎組合の辻番人が聞※き取つた。本多から大目附〈一屈〉に屈けた。辻番所組合遠藤但馬守胤統から酒井〈雅樂頭忠實〉 忠〈顯〉 學の留守居へ知らせた。

酒井家から役人來て、三人の口書を取つて

（雅樂） 忠〈實〉 學〈一〉に復命した。

〈翌〉 翌十四日の〈朝〉 朝は〈護〉 護持院原一ばいの見物人である。〈敵〉 敵を討つた三人の周圍へは、山本

家の〈親〉 親戚が追々〈驅け〉 馳せ附けた。三人へ一鵜に鵜殿家から〈鰯〉 鰯と生菓子とを〈贈〉 贈つた。

西の下〈刻〉 刻に西丸目附徒士頭十五番組水野采女の指の指〈圖〉 圖で西丸徒目附永井 龜次〈郎〉 郎、久保田英次〈郎〉 郎、西丸小目附〈平〉 平岡唯八〈郎〉 郎、井上〈又〉 又八、〈使〉 使之者志母谷金左〈衛〉 衛門、伊丹長次〈郎〉 郎、〈黒〉 黒緞之者四人が出張した。それへ一に本多家、遠藤家、〈平〉 平岡家、〈鵜〉 鵜殿家の出役があつて、先づ三人の人體、衣類、持物、手創の有無を取り調へた。創は誰も負つてゐない。次へ一に永井、久保田兩徒目附へ一に當てた。口書を取つた。次へ一に死骸、骸の見分分分をした。酒井家へ一に奉公した（名前） 時の龜藏の名を以て（文） 調書へ一に載せられた創はかうである。「背 中左の方一寸程突 程突創一箇所、創ぐちほれあが 口腫上り深さ相知不申、領へ一に切創一箇所、長さ

三寸〔程〕程、深さ二寸〔程〕程、同所下の方へよ
に切創一箇所、長さ一寸五〔分〕分〔程〕程、深さ六
〔分〕分〔程〕程、左耳之〔脇〕脇へよに切創一箇所
※、長さ一寸、深さ六〔分〕分〔程〕程、右之〔肩〕
肩より乳へ掛け一尺〔程〕程、切創一箇所、深さ四寸〔程〕
程、同所脇へ肩〔肩〕に切創一箇所、長さ二寸、深
さ一寸〔程〕程、〔切創一箇所〕咽〔突〕突、創一箇
所、長さ三寸〔程〕程、都合七箇所。」衣類は木綿單
物、博多〔帯〕帯（）、持物は〔浅葱〕浅葱手拭一筋であ
る。（タ）死〔骸〕骸は玉木〔勝〕勝三〔郎〕郎に預
け置かれた。次〔よ〕に呼び出されて〔來て〕ゐた、
龜藏の口入人〔神〕神田久右〔衛〕衛門町代地富士屋治
三〔郎〕郎、同五人組、龜藏の下〔請〕請宿〔若〕若狹
屋龜吉が、口書を取られた。次〔よ〕に九〔郎〕郎
右〔衛〕衛門※等の〔屈〕屈を聞※き取つた辻番
人が、口書を取られた。
見〔分〕分の役人は戌の上〔刻〕刻に引き上げた。

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

見〔分〕分が濟んで、〔鶴〕鶴殿吉之丞から西丸目附松
もすけのじより
本助之丞へ、酒井家留守居庄野慈〔父〕父右〔衛〕衛門
※から酒井家目附へ、酒井〔忠實〕家から用番大久保加
賀守忠眞へ〔屈〕屈けた。

十五日卯の下〔刻〕刻に、水野采女の指〔図〕圖
〔依つ〕で、庄野へ九〔郎〕郎右〔衛〕衛門等三人
を引き渡された。〔前晚〕前晚酉の〔刻〕刻から、九
〔郎〕郎右〔衛〕衛門※とりよとを載せるため〔よ〕
に、酒井家で〔さ〕さし立てた二挺の乗物は、辻番所
へよに來て控へてゐたのである。（りよは）九〔郎〕
郎右〔衛〕衛門※（は）、〔文〕文吉は本多某〔よ〕
に、りよは〔神戸〕神戸に預けられた。
此日酉の下〔刻〕刻に町奉行筒井伊賀守政憲が九
〔郎〕郎右〔衛〕衛門等三人を（召び）呼び出した。
酒井家からは目附、下目附、足輕小頭〔よ〕に足輕を添
へて、乗物〔よ〕に乗つた二人と徒歩の〔文〕文吉と
を警固した。（戌の下刻よ）三人（は）が筒井政憲（が）

直の取調を受けて下がった。(。)のは、戌の下へ刻であつた。

十六日へよには筒井から再度の呼出(を受け)が来た。酉の下へ刻に與力仁杉⁵⁵ 八右へ衛衛門※の取調を受けて、口書を出した。

此日へよにりよへは酒井龜之進から、(未)三右へ衛衛門※の未へ亡亡人へは大澤(右京太夫)家から、願へよに依つて暇を遣された。りよが元の主人細川家から、(は)へ敵討の(祝)祝儀を言つてよこした。

十九日へよには筒井井から三度目の呼出が来た。九へ郎郎右へ衛衛門※等※三人は口書下書を読み聞※せられて、(戌)酉の下へ刻に引き取つた。

二十三日へよには筒井から四度目の呼出が来た。口書へ清清書へよに實印、爪印をさせられた。

二十八日へよには筒井から五度目の呼出が来た。用

番老中水野越前守忠(邦)邦の沙汰で、九

へ郎郎右へ衛衛門※、りよは「奇特之儀へよに付構なし、」へへ文文吉は「仔細無之、構なし」と申し渡された。それから筒井の褒詞を受けて酉の下へ刻に引き取つた。

續いて酒井家の大目附から、町奉行の紀明が濟んだから、「へ平平常通心得べし」と達と、九へ郎郎右へ衛衛門※、りよ、文文吉の三人へよに達(し)せられた。九へ郎郎右へ衛衛門※、りよは天保五年二月へよに貰つた御※へ判判物を大目附へよに納めた。

閏※七月朔日へよにはりよへよに酒井家の(御※)御※用召があつた。辰の下へ刻に(親)親戚山⁵⁶本へ平平作、櫻井須磨磨右へ衛衛門が(麻)麻上へ下で付き添つて、御※用部屋へよに出た。家老河合小太へ郎郎に大目附が陪席して申渡をした。「女性なれば別して御※賞美あり、三右へ衛衛門※の家名

相續(仰) 被仰附、宛 行 十四人扶持被
下置、追て相應の者、壻養、婿養子(被) 可被仰附、
又 近日 中、奥、奥御※目見可被仰附」と云
ふのである。

十一日「よ」にりよは中、奥(御※) 目見「よ」
に出、御※紋、紋附、黒、黒縮緬、紅裏眞綿添、
白「羽」羽二重一重「を」(下された。「よ」菓子添

へて」と菓子一折とを賜はつた。(其外菓子が出た。)同

じ日「よ」に濱町(の)で後室(へ)「御※」目
見をして、から「縮縮緬」一反、「を」賜はつた。

同じ所※の故酒井忠實室專壽院(殿)から(と三名
の)「よ」(御※) 目見をして、盃を下され、「高砂染縮

緬帛二、扇二本、包、包之内」を賜はつた。

九「郎」郎右「衛」衛門が事「よ」に就いては、酒

井忠「實」學から家老本多意氣揚へ、「九「郎」

郎右「衛」衛門は何の思召も無へ、以「前」前之

通可召出、且行「屈」屈候段「満」満足褒美可

「護持院原の敵討」森鷗外自筆原稿

「致」致、別段之思召をもつて御※紋附「麻」麻
上下、被下置」と云ふ沙汰があつた。本多は九

「郎」郎右「衛」衛門※(を)「よ」に百石(高よし
死)遣つて、用人の上席「よ」にした。りよへも本多か

ら「反物代千疋」「が往き、を」贈り、
本多の母から「縮縮緬一反、交、交肴一折」

「が往つた。」を贈り贈つた。』57

「文」文吉は酒井家の目附役所「よ」に呼び出され

て、「表」元表小「使」使、山本九「郎」郎右「衛」
衛門家來と云ふ資格で、「格段骨折奇特「よ」に附、小

役人格「て」「よ」に被召「抱」抱、御※宛 行 金
四「両」兩二人扶持被下置」と達せられた。それから

「苗」苗 字を深中と名告つて、酒井家の下邸集鴨
の山番を勤めた。

此「敵」敵 討のあつた時、屋代太「郎」郎弘賢は

七十八「歳」歳で、九「郎」郎右「衛」衛門、りよ

「よ」に(祝の)賞美の歌を贈り贈つた。「又」又も

あらじ魂祭るてふ折へよに逢ひてへ父父兄の
仇討ちしたぐひは。幸へよに太田七左衛門衛門
が死んでしまったから十二年程立つてゐるので、も
うパロディを（以）作つて屋代を擲へ揃揃ふものもな
かつた。

(35)

58

注(1) 黒ベンによる「とみ」「しげ」「とみ」、赤ベンによる

「てる」は、鷗外の付けたルビである。

(2) 欄外に赤ベンによる「ホトトギ」の文字がある。

(3) 「しらがみ」から「はくし」への修正は鷗外によるものと思われる。

(4) 「しな」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(5) 「原稿」には「かねべや」のルビがあったようだが、初出では削除されている。

(6) 「よし」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(7) 初出では改行せず、前行に続いている。

(8) 「である。」の下に赤ベンによる「」の印がある。

(9) 「出るのかい。」の下に赤ベンによる「」の印がある。

(10) 「なほ」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(11) 「は」は島田青峯による補入と推定される。

(12) 「弾」の扁「弓」の部分に赤ベンで「馬」を書き込む形で修正がされている。

(13) 「が」の濁点のみ黒ベンで消去する形で修正がされている。

(14) 「は」は島田青峯による補入と推定される。

(15) 「不孝者」と「を」とをつなぐ印が赤ベンで付けられている。

(16) 「ら」は島田青峯による補入と推定される。

(17) 「云つた。」と「龜」とをつなぐ印が赤ベンで付けられている。

(18) 「ち」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(19) 「坂」の扁「土」の部分に赤ベンで「卜」を書き込む形で修正がされている。

(20) 「利」に赤ベンで「リ」を書き加える形で修正がされている。

(21) 「を」と「二人」との間に赤ベンによる入れ替え記号「S」がある。

(22) 注(19)に同じ。

(23) 注(19)に同じ。

(24) 注(19)に同じ。

(25) 「姿は」と「もう」とをつなぐ印が赤ベンで付けられている。

(26) 文脈から判断すれば「字平」ではなく「文吉」であるはずだが、初出本文、『天保物語』所収本文とも「原稿」段階での鷗外の誤記のままになっている。なお、昭和四十七年十二月岩波書店発行の『鷗外全集』第十四巻において「文吉」に改められた。

(27) 「て」に赤ベンで濁点を書き加える形で修正がされて

いる。

(28) 「の」の横に「を」を黒ベンで消去したものである。

(29) 「ちび」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(30) 「なり」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(31) 「途中で」と「敵を掴まへた」との間に黒ベンによる

入れ替え記号「S」がある。

(32) 「ひろ」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(33) 「のり」は鷗外の黒ベンによるルビである。

(34) 注(27)に同じ。

(35) 赤ベンによる「段ヌキ」の指示がある。

付記

今回の翻刻については、早稲田大学文学部教授竹盛天雄先生よりお口添やらご助言をいただいた。また、資料の調査に際し、早稲田大学図書館特別資料室のご援助をいただいた。記して謝意をしたい。

(おぐら ひとし 愛知淑徳短期大学助教授)